遊びの中の「食べる」こと

入江礼子

「食べる」ことは、生きていく上で必要欠くべからざる条件であることは言うまでもないことですが、子ども達の遊びの中でもこのことを含んでいるものは、丁寧に受け止める必要があると考えています。

私が初めてこの事の重要性に気付かされたのは、幼稚園の年長組の担任をしている時のことでした。その日、外は肌寒い雨がそぼ降っていました。組(くらす)の中は子ども達の持っていき場のないモヤモヤしたエネルギーが充満し、私自身も彼らのそんな雰囲気に呑まれ、部屋の片隅に小さなコーナーを作り、そこに陣取ることで、かろうじて気持ちを支えていました。そこへK君がやってきて粘土遊びをはじめました。「先生、何が好き?」(K) 「カニコロッケ」(私) すると彼は俵型のカニコロッケを作り「ハイッ」と差し出してくれました。「そうだ。ウドンも作るよ。食べてね。」(K) 「いいわよ。」(私) そう言う彼は、丼から箸、卵、蒲鉾など色々作り「食べてッ!!」(K) と持ってきました。「いただきまーす。モグモグ… あーおいしかった。あっ、おつゆも飲まなきゃ。ゴクゴク…」(私) 「あのね、それおつゆじゃないよ。ジュースにお砂糖が入ってるんだよ」(K) 「エッ、ペッペッ、大変」(私) 「アハハヘヘヘ(いたずらっぽく笑う)」(K)

子ども達が大人にかかわりを求めて来る時、言葉で直接的に「私はあなたにかかわりを求めています」とは言いません。この例のように食べるものを作りそれを手渡すという行為の中にすべての意味が含まれているのです。K君が一生懸命作ってくれたものを私が食べることで彼とのかかわりが成立したのです。ところがK君はこの遊びの終わりで、私がおつゆと思って飲んだものをおつゆじゃないと言って私が食べるこ

とを拒否しました。「食べる」ことには、また「呑み込む」という過程が含まれているのです。K君も一旦は私と遊びの関係が成立したことを喜んで色々と作ってくれましたが、それを次から次へと食べていく私に一種の「呑み込まれる恐ろしさ」を感じていたのではないでしょうか。当時、十月であり、入園当初は少々線の細い感じがしたK君も、かなりしっかりとした「自我」が芽生えはじめ、それが、私に呑み込まれっ放しになることを拒否したように思うのです。「食べる」ことを中核とした遊びの中にはそこまでの意味が包含されていると考えてよいのではないでしょうか。

その後数年経ち、二児の母となった私は、やはり現実の「食べる」ことと、遊びの中の「食べる」ことに否応なく毎日触れて過ごしています。二歳一か月の娘Aは、最近は一人遊びの時間も増し、私が炊事や洗濯をしている間は、お気に入りのぬいぐるみをオンブしたり、絵本をみたり、ベッドにねかされている弟に手を出したりして過ごしていますが、ふと、私の所へ戻ってきて、「はい。ごはんですよ。食べてください。」「これハンバーグよ」などと言って手を差し出し、私が家事の手を休めて「まあおいしそう。いただきまーす。」と言って食べるとニコニコし、「もっと?」と聞きます。もっとと答えた時など走って作りに帰り、ササッと作ってまた持ってきます。何度かこうして遊ぶと、又自分の遊びへと戻っていきます。いつだったか忙しくて「ちょっと待っててね」と言ってしまいすぐに彼女の差し出したものを食べないでいると、急にグズグズ言って私の傍にまとわりつき、一人遊びを楽しむ余裕を失ってしまいました。母に拒否され、Aは生々しさまで失ったのです。

さて四か月の息子T。彼は毎日ミルクを飲んでいます。世の母の常で私も彼がいっぱい飲んでくれるとホッと一安心します。これは年齢が小さいほど飲むこと自体が直接生存にかかわるとも言えるのですが、むしろ私の与えたものを受け入れて飲んでくれるということで安心しているように思うのです。離乳期になるとよく離乳食を食べないといってそれはそれは心配なさるお母さんがいます。これも先程同様、「自分が手をかけたものを食べてくれない」ことで無意識のうちに自分が子どもに拒否されたと感じ、それが不安の種になるのだと思います。

要するに遊びの中の食べることも実際に食べることも「人と人とのかかわり」がその奥に深まれているので、大切に考えなければならないと思うのです。